

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.25-1 (通巻 71 号) 2017.8.18 発行



ポスター：水爆禁止署名運動 1954 年
P9-10 運営委員リレー連載に関連記事

Contents

01	スポット ミュージアムの收藏品 68	グリーンハムコモンのバンド
02	巻頭つれづれ	「鳥の糞」とアリから思ったこと
04	着任挨拶	「八年抗戦」から「十四年抗戦」へ
05	平和教育研究	日本国憲法施行 70 周年記念国際シンポジウム 「欧州とアジアの人権」
06		ベルファストでの国際平和博物館会議について
07		博物館海外調査報告
09	運営委員リレー連載	平和運動の記憶
11	ミュージアムおすすめの一冊	『アトキンス 物理化学（下）第 8 版』
12	25 周年記念事業	
13	事業報告	

グリーンハムコモンバンド

髪の乱れや髪が顔にかかることを防ぐための装身具を「ヘアバンド」や「カチューシャ」と言いますが、これらは日本だけの呼び方です。ヘアバンドは和製英語、カチューシャは大正時代に上演されたトルストイの『復活』の登場人物に由来するようです。こうした装身具は古くからあり、古代ローマにも見られました。19世紀には『不思議の国のアリス』の挿絵の中で、アリスが身に着けています。1920年代にはきらびやかな飾の付いたフラッパーのヘアバンド、1940年代には工場などで働く女性が布で髪をおさえた姿がよく見られました。1950年代、60年代にはプラスチック製やスカーフを使ったものが流行りました。70年代にはヒッピーやロックミュージシャンなどからバンダナを頭に巻く形が、1980年代には、エアロビクスなどのスポーツ用のヘアバンドが流行りました。

この資料は、1980年代に流行していたスポーツ用バンドと同様の形ですが、ウールの毛糸を編んで作られています。若草色、紫色、白を基調にしたこのバンドに編み込まれている「Greenham Common」の文字は、1981年にイギリス南部のグリーンハムコモン空軍基地に西側の巡航ミサイルが配備されることに反対する女性たちが基地周辺で反対運動のキャンプを展開したグリーンハムコモン女性平和キャンプを表すものです。1980年代にこの運動の中で支援用に作られたものですが、これを紹介しているブラッドフォード大学の平和博物館でお土産品として売られていたものです。

1981年の夏、イギリスにあるアメリカ空軍基地に巡航ミサイルが配備される計画を知り、これに反対する36人の女性、4人の赤ちゃん、6人の男性が、150キロ以上離れた南ウェールズから、アメリカ空軍基地が作られているグリーンハムコモンへ徒歩で向かいました。9月5日に彼らは空軍基地の入り口ゲートに到着し、司令官に宛てた手紙を渡しました。Women for Life on Earthのメンバーたちは、この問題に対する議論を開くため、基地の境界にキャンプを張ることを決めました。このニュースはすぐに平和運動家の間に知れわたり、核廃絶運動団体であるCNDのメンバーをはじめ多数の目的意識と才覚のある女性たちが馳せ参じ、2000年に解散されるまで19年間にわたって続いた反対運動に発展しました。

この運動の最大の特徴は、女性だけのキャンプになったことですが、当初女性の中にも男性を締め出すことに反対の声がありました。しかし、平和的な運動として警察や軍隊に対峙するためにこの選択をし、訪れた男性には退去を依頼しました。12

月12日と13日には世界中の女性たちに向けてグリーンハムコモンへの参加が呼びかけられ、イギリス全土、ヨーロッパをはじめ各地から集まった約3万人の女性たちが基地を取り囲みました。翌83年の1月1日には44人の女性たちが基地を囲む金網を切断して内部に入り、建屋の上に平和の旗を立て、手を取りあって、踊り、新年を祝いました。この様子はテレビでも流されました。こうした活動に対する軍隊や警察の圧力は増し、逮捕や懲役もグリーンハムコモンの活動家として生きることの一部とみなされるようになりました。また、こうした警察や裁判への対応、野外のテントで生活するための食糧やごみの問題などの日常的な生活上の課題、地域住民との関係（地域住民の中にこの活動を支援する人もありましたが、小汚いキャンプが大量に乱立することで田園としての雰囲気壊されるなどの懸念で歓迎ムードではなく、グリーンハムコモンのキャンプを追い出すための団体も作られました）、キャンプの中での多様な女性たちの共同生活の運営など実際の様々な課題を女性たちはこなしながらこのキャンプが続けられていきました。女性だけの場であることから、キャンプの中には、女性同性愛者の活動グループもできました。

この運動が直接的な実行力を伴わないことから、力ある平和運動としての評価は高いものではありませんでしたが、近年公開された公文書の中に、当時、議会のメンバーたちはこの運動によって、巡航ミサイル配備に対する世論の賛同が得られなくなることを恐れていたとの資料も見つかっており、この運動の意義が多面的に再評価されています。

参考文献：S. Moore, H. Khaleeli, M. Sarner, L. Harper, J. McCurry (2017 March 20) How the Greenham Common protest changed lives: 'We danced on top of the nuclear silos' The Guardian. <http://www.apastyle.org/learn/faqs/cite-newspaper.aspx> 2017年7月15日閲覧
Lyn Smith (2017). People Power - Fighting for Peace. London: Themes and Hudson.

(学芸員 兼清順子)



グリーンハムコモンのバンド (20世紀後半) 4.5 × 23 × 1cm

巻頭 つれづれ

「鳥の糞」とアリから 思ったこと

安齋育郎

(国際平和ミュージアム名誉館長)

5つの平和博物館を訪れる

2017年5月半ばからひと月ほどの間に、戦争と平和の資料館「ピースあいち」、戦没画学生慰霊美術館「無言館」、ひめゆり平和祈念資料館、沖縄県平和祈念資料館、沖縄国際平和研究所展示室を訪れる機会がありました。

「ピースあいち」は開設10周年記念式典、「無言館」は第20回「無言忌」への出席、「ひめゆり平和祈念資料館」は理事の普天間朝佳さんとの共著の打ち合わせ、「沖縄県平和祈念資料館」は同館で開かれる日本平和博物館会議についてのご挨拶、「沖縄国際平和研究所」は6月12日92歳の誕生日に亡くなられた元県知事の大田昌秀さんの告別式の折に再訪したものです。それぞれに思うところのある訪問でしたが、本稿では「無言忌」で体験したとても小さな発見についてご紹介したいと思います。

「無言忌」の式典でのミクロな発見

「無言館」は窪島誠一郎さんが画家の野見山暁治さん（文化功労者、文化勲章受章者）の協力を得て、全国を巡って画学生の遺作を収集し、1997年に長野県上田市の緑豊かな森の中に開設されたものです。立命館大学国際平和ミュージアムはすぐに館主の窪島誠一郎さんとお会いし、京都で特別展を開催しました。無言館が館外で開催した初めての特別展でした。

協力関係はその後にも発展し、やがて国際平和ミュージアムの中に「無言館コーナー」が作られ、開設式には窪島さんの父である作家の故・水上勉さんも出席されました。2005年のリニューアルでは新たに展示室「無言館京都館いのちの画室〈アトリエ〉」が設えられ、ご遺族も含めて画学生の作品や遺品を鑑賞して頂いています。

ところで、「無言館」では、毎年6月初旬、静かなたたずまいの庭を会場として「無言忌」の式典を開催してきました。2017年の今年は第20回目に当たりましたが、年を重ねることにご遺族の高齢化も進み、鬼籍に入られた方や健康上の理由で出席が叶わなくなった方も少なくないため、窪島館主は、従来のような形での遺族中心の「無言忌」は難しくなりつつあると感じていました。毎年の「無言忌」で冒頭に挨拶される野見山暁治さんも、すでに96歳になられました。「今年を一つの節目としたい」という館主からの案内に、例年の2倍をこえるご遺



無言館前庭で開催された第20回「無言忌」(2017年6月4日、長野県上田市)

族が参加され、第20回「無言忌」は写真のように厳かに執り行われました。

実は、私も「無言忌」では毎年「来賓挨拶」を求められる立場にあります。前もって館主から打診がある訳ではないのですが、当日受付で渡されるプログラムには例外なくそう書いてあります（笑）。「阿吽の呼吸」とでも言うのでしょうか。

今年も、写真のように、窪島館主や野見山暁治さんとともに参列者と対面して前方の椅子に座っていました。粛々と進められる式典の雰囲気身に身を浸しながら、私は何気なく目の前の庭の舗装面に視線を落としていました。何十回も見慣れている特に変わりのない風景のようでしたが、ふと見ると、路面に乾いた円形模様の「鳥の糞」があることに気づきました。「鳥の糞」と言っても、上空は電線などの人工構造物もない青天井なので、きっとたまたま落下した糞が舗装面で乾いて白い斑点を形成したのでしょう。直径2センチ足らずの白い模様が1個、路面にプリントされたような模様になっています。もっとも、私たちが普段「鳥の糞」と呼んでいる白いドロリとしたものは、実際には、アンモニアを尿酸として排泄した「鳥の尿」らしいので、このプリント模様は「乾いた糞尿混合物」なのでしょうが、舗装面の白色模様は「できたてホヤホヤ」というよりは、かなり時間が経って乾燥している感じでした。

やがて、視野の中に、大小合わせて3匹のアリがジグザグと行き来している姿がとらえられました。しばらくすると、その中の一番大きなアリ（と言っても1センチ程で、おそらく「クロオオアリ」でしょう）が、「鳥の糞」の上で立ち止まりました。

すると、暫時あって体長8ミリ程の「クロヤマアリ」と見られるアリも、クロオオアリの左横に陣取りました。二人とも一そう、この段階で私には「アリ」というよりも、「一生懸命に生きようとしている小さな生命体」のように感じられ、「二匹」というよりは「二人」と呼びたい気分になっていたのですが、「鳥の糞」の白い円形模様に取りついて「ただ今仲良くお食事中」という感じでした。

20~30秒後、右往左往していた体長6ミリほどの小アリ（多分これも「クロヤマアリ」でしょう）が、遅まきながら二人の左横に座を占め、三人仲良くじっと、つまり大が小を駆逐するような素振りもなく、長い間同じテーブルに着いていたのです。

信州の森の中ですから、植物性にせよ動物性にせよ、食料には事欠かないと勝手に思っていたのですが、無言館周辺のエコスペースで暮らすアリにとっては、「鳥の糞」も貴重な栄養源またはご馳走なのかもしれません。



左から「無言忌」の窪島誠一郎館主、野見山暁治さん、安齋（右端）

私は目の前の小さいのちの営みから、ある生命体の排泄物が別の生命体の栄養源になるという循環の妙について思いを巡らせていました。

具体的な事象から抽象的な概念へ

私は2013年3月号の本欄に、「駅で見た不可解な花キャベツ」と題して、少し変わったエッセイを書きました。京都と奈良の間に位置するJR宇治駅での体験です。ホーム直下の線路際に、花キャベツに似た形の「造形物」を発見したのですが、実はこれは酸性雨の作用でホームのコンクリートに含まれる炭酸カルシウムが溶け落ちてできた「鍾乳石」のようなものでした。

平和学には“Think locally, act globally.”（地域から考えて、地球規模で行動せよ）という言葉がありますが、私はそのエッセイで『『等身大の日常的体験』の中に『地球大の普遍的問題』を感じ取れるよう、感度を研ぎ澄まし、広くアンテナを張りましょう』と書きました。

平和博物館は「平和」というかなり抽象的な概念を扱います。そして、参観者たちが「平和創造のために自分に何ができるか」を考える場として役立ちたいものだと思いますが、平和の定義をパネルに書いてみても、また、いきなり過去の戦争の実態を展示してみても、なかなか思うようには伝わらないでしょう。平和博物館に関わる私たちは、それこそ「等身大の日常的体験」の中に「地球大の普遍的問題」を感じとれるような展示や学習会やワークショップなどを大いに工夫していきたいものです。

第20回「無言忌」の会場で視線を落とした先に見えた“アリと「鳥の糞」の物語”は、式典主催者には不謹慎なことですが、それこそ「無言館前のエコ・パントマイム」だったように思われます。

着任挨拶

「八年抗戦」から 「十四年抗戦」へ



絹川浩敏

(国際平和ミュージアム副館長 / 経営学部教授)

4月から副館長に着任した経営学部の絹川です。よろしくお願いたします。

私の専門は、「十五年戦争」期の日中文化交流史です。私が、学部や大学院で学んでいた80年代は、江口圭一の『十五年戦争の開幕』（小学館、1982年）『十五年戦争小史』（青木書店、1986年）、黒羽清隆『日中十五年戦争』（上中下）（1977年、78年、79年）が、十五年戦争を学習する教科書でした。この用語は、鶴見俊輔が、1956年「知識人の戦争責任」（『中央公論』1月号）で、最初に使用したものとされています。戦争責任、日本の侵略、加害責任を明確にするものだと80年代には好んで用いられていました。私が初めて中国に行った1982年夏は教科書問題があったために、加害責任について中国の学生と議論する機会もありました。731部隊を描いた森村誠一の『悪魔の飽食』が出たのも1981年、1982年のことです。

中国では、今年1月、「抗日戦争」の起点を、1937年7月7日の盧溝橋事件ではなく、1931年9月18日の柳条湖事件に改める教育部の通知が出ました。「八年抗戦」から「十四年抗戦」へと変え、「抗日戦争」前期（31年9月18日—）、中期（37年7月7日—）、後期（41年12月8日—45年9月2日）とする鶴見俊輔が提唱した考え方に近いものとなりました。この教育部の通知のきっかけは、2015年7月、習近平が、党政政治局の学習会で、「柳条湖事件から14年間の歴史を一貫したものと学ばなければならない」と発言したことによります。2015年1月には、日本でも天皇が「本年は終戦から70年という節目の年に当たります。多くの人々が亡くなった戦争でした。各戦場で亡くなった人々、広島、長崎の原爆、東京を始めとする各都市の爆撃などにより亡くなった人々の数は誠に多いものでした。この機会に、満州事変に始まるこの戦争の歴史を十分に学び、今後の日本のあり方を考えていくことが、今、極

めて大切なことだと思っています。」と新年に当たったの「ご感想」を述べた年でもありました。日本の一部の学者には「31年前後から盧溝橋事件までの旧日本軍による『被害』を今後一層強調する可能性もあり、中国が歴史問題で日本を責める新たなカードを増やそうとしている」といううがった見方もあるようですし、習近平の権威付け、共産党の権威付けであり、「学問の自由」への締め付けだとする見方もあります。しかし、15年7月の発言が、17年1月に教育部の通知となって実現したとする見方は、すこし期間が開きすぎているように感じます。特に習近平の権威から考えて、一年半も指導部内の調整に費やされるというのはスピード感に欠けています。

「抗日戦争」とは、日本に抗う戦いであり、「抗日」は、1919年の五四運動から始まっていました。五四運動は、いわゆる対華21か条要求に対する撤回要求であり、山東利権の回収を求め、ヴェルサイユ講和条約への調印拒否の成果をもたらしました。対華21か条要求の最後通告の日（5月7日）とその受諾日（5月9日）は、国恥記念日と呼ばれました。同年3月1日の三一独立運動と並んで、東アジアのナショナリズムの高まりを象徴する運動でした。「抗日」は「反日」と同義ではありません。「抗日」学生達は、日本に留学する者も多くいました。短い戦間期であった1933年-36年には、多くの留学生が日本にやってきました。彼らは、当時の日本で「近代」を学びました。「近代」の価値観を日本人・日本から学んだのです。

近代日本、近代中国のコミュニケーションは相互誤解の歴史でもありました。人間は、見たいと思うものしか見えない性質があります。見たくないものは見えないのです。五四運動を日本から比較的正確に観察していた日本人に、吉野作造がいます。30年代の中国ナショナリズムの高まりを冷静に見ていたのは尾崎秀実でした。

国際平和ミュージアムが、相互誤解を恐れず、他のアジア諸地域とのコミュニケーションを活発にしていこう一助になれば幸いです。

日本国憲法施行 70 周年記念国際シンポジウム 「欧州とアジアの人権」

出口雅久

(平和教育研究センター運営委員 / 法学部教授)

2017年3月24日から26日まで立命館大学衣笠キャンパス・創思館カンファレンスルームにおいて、立命館大学法学部、同大学人文リサーチオフィス、ドイツ学術交流会、コンラート・アデナウアー財団、ロベルト・ボッシュ財団、社会科学国際交流江草基金、石川明教授記念手続法研究所、そして、国際平和ミュージアムなどの協力により、ドイツ、フランス、タイ、ベトナム、台湾、中国、韓国、日本より国内外80名ほどの法学者・実務家を招聘して東アジア法律家会議が開催されました。このアジア法律家会議は、ドイツに留学経験のある東アジアの若手法律家の学術ネットワークを構築することを目的として、ドイツ学術交流会が中心となって、これまでソウル、台北、北京で開催され、今回は京都・立命館大学で開催されることになりました。

ご案内の通り、本学国際平和ミュージアムには2016年12月に平和教育研究センターが設置されました。そこで、今回はじめて平和教育研究センターのプログラムの一つとして、学内外の関係諸団体のご協力を得て3月24日に「欧州とアジアにおける人権」をテーマとしてかなり大規模な国際シンポジウムを開催することができました。とりわけ、本国際シンポの実施にあたってご協力いただいた学内外の教職員・学生・院生の皆さんには心より感謝の意を表する次第です。なお、この国際シンポには2016年度ヨーロッパスタディプログラム学生諸君も20数名が聴講生として参加したことを付言しておきます。

さて、今回の国際シンポジウムの総合司会は、ドイツ学術交流会奨学生でもある国際平和ミュージアム専門委員・平和教育研究センター運営委員である筆者が担当しましたが、今回の学術企画は国際発信が目的であったので、ドイツ語ではなく、会議



Jean=Paul Costa 元欧州人権裁判所長官による基調講演



国際シンポジウム参加者全員での記念写真

用語はすべて英語で実施することにしました。日本国憲法施行70周年を記念した国際シンポの開会式でのフルート演奏の後、来賓として知日派として著名な Kim Hwang-Sik 韓国元国務総理をはじめ、Francesco Fini 欧州連合代表部副代表、Johannes Schweizer ドイツ総領事館 Senior Officer、樋口隆一 DAAD 友の会会長、Dorothe Mahnke DAAD 東京事務所長、Gisela Elsner コンラート・アデナウアー財団アジア法の支配プログラム所長、ロベルト・ボッシュ財団 Julian Hermann、および和田真一・本学法科大学院研究科長からご挨拶がありました。

その後、司会を本学法学部吾郷眞一教授（アジア行政裁判所判事・平和教育研究センター運営委員）にバトンタッチし、本学客員教授 Jean=Paul Costa 国際人権研究所所長（元欧州人権裁判所長官）が “The European fundamental rights’ protection system, with the specific problem of the accession of the Euroepan Union (EU) to the Euroepan Convention on Human Rights” というテーマで基調講演を行った後、薬師寺公夫・本学法科大学院教授（元国際法学会理事長）、神余隆博・関西学院大学副学長（元在ドイツ日本大使）、谷口安平・京都大学法学部名誉教授（シンガポール国際商事裁判所判事）からコメントがあり、日本国憲法施行70周年記念に相応しく欧州とアジアの人権について議論を深めることができました。

国際シンポジウムの終了間際には、モンテ・カセム国際平和ミュージアム館長・吉田美喜夫総長・山井敏章国際部長も駆けつけていただき、東アジアの法律家だけではなく、タイやベトナムなどの東南アジアの法学者にもご参加いただき、本学の目指すアジアからの学術発信に重点を置いた新しい国際学術交流について法学の分野でも強力で推進することができたことは極めて有意義でした。なお、二日目以降は、ドイツ学術交流会と本学が共催して東アジア法律家会議がドイツ語で開催されたことを付言しておきます。同会議の詳細は下記のサイトをご覧ください。

<https://goo.gl/photos/BSGDXYuCuPKMG8FBA>

<https://goo.gl/photos/MbgrSBgsSfpgZZUo6>

ベルファストでの 国際平和博物館会議について

山根和代

(平和教育研究センター運営委員 / INMP 理事)

平和教育研究センターのプロジェクトの一つとして、現在「3.11 後の平和博物館の展示内容の改善と国際ネットワークの構築」プロジェクトに取り組んでいます。

メンバーは安齋育郎名誉館長、桂良太郎元本学教授、山根和代です。このプロジェクトでは、日本を含むアジアの平和博物館との交流を促進し、さらにアジア以外の平和博物館との交流も促進して、どのように国際的に平和研究に基づいた平和教育と平和構築をしていくべきなのかを研究課題としています。今回は特に第9回国際平和博物館会議に焦点を当てて報告をします。

2017年4月10日から13日まで北アイルランドのベルファストのアルスター大学で、第9回国際平和博物館会議が開催されました。これまではINMP (International Network of Museums for Peace 平和のための博物館国際ネットワーク) に関係する平和博物館が主催で開催されてきましたが、今回初めて紛争後和解を求めているベルファストで開催されました。

この会議は、1992年にイギリスのブラッドフォード大学において開催された第1回国際会議以来、ほぼ3年に一度のペースで開催され、今回は第9回国際会議としてベルファストで開催されました。テーマは、「平和のための生きた博物館としての都市」で、ベルファストが対立の深かった都市から平和と和解の都市へ変遷したことに焦点を当てました。今回の国際会議は、INMP 創立25周年記念の年でもありました。4月10日に開催された理由は、ベルファスト合意が1998年4月10日にイギリスとアイルランドの間で結ばれた19周年記念日だったからです。

参加者は22か国から140名参加し、日本からは25名（琉球放送の取材関係者を含めると27名）が参加しました。福島プロジェクトでご多忙の安齋育郎名誉館長（INMP 理事）は国際会議に参加することはできませんでしたが、以前国際平和博物館会議を2回開催した経験を活かし、ベルファストでの国際会議プログラムの作成、日本人参加者のために国際会議英文報告要旨の和訳集編集・作成、INMP の体制の在り方への提言など、日本だけでなく国際的に会議の準備に関わられました。

国際会議の前には、イギリスのブラッドフォード平和博物館、平和学部のあるブラッドフォード大学などを訪問する機会がありました。また国際会議後は Museum of Free Derry や、Corrymeela という紛争解決を学ぶ施設などを訪問し、北アイルランドの紛争について、また紛争解決の努力を学ぶことがで

きました。

国際会議では本会議以外に多くの分科会が二日間同時に開催され、すべて参加することは不可能でした。しかし幸いなことに、報告者の要旨や原稿はオンラインで読むことができるようにしてあります。英文ですが、次のINMPのウェブサイトでは報告の要旨、英文原稿などを入手できます。

<https://sites.google.com/site/inmpconference/>

国際平和ミュージアムの学芸員の兼清順子さんは、「戦争体験者不在の平和博物館」と題して報告しました。また立命館大学映像学部大学院生の山下一騎さんは、「立命館大学国際平和ミュージアムにおける平和のための展示物とゲームの制作について」と題して報告しました。これは昨年の9月に国際平和ミュージアムにおいておこなわれた、「RENKEI プロジェクト」のワークショップについて報告したもので、特に平和のためのゲームについて参加者から高く評価されました。私は本会議において、「INMP 25周年」について報告し、さらに分科会では「平和と和解のための教育」と題して報告しました。

また報告要旨の日本語は安齋名誉館長と山根によって冊子としてまとめられたので、英語を使わない方も読むことができます。現在参加者の感想文を編集集中ですが、それを読むと国際会議の全体がわかるでしょう。

私は Museums for Peace Worldwide という世界の平和博物館のリストの作成にも関わりましたが、それはINMPと安齋科学・平和事務所のウェブサイトで紹介されています。各平和博物館の情報を含めたCDも作成し、今後広く紹介したいと考えています。なおINMP Newsletter 18は安齋育郎名誉館長の編集で、INMP25周年の特集号になっています。INMPの歴史、25周年への祝辞、INMP出版物など盛りだくさんの内容です。その日本語版が今後INMPのウェブサイトに載せられる予定です。



INMP 理事とノーベル平和賞受賞者の Mairead Maguire と北アイルランドストーモント国会議事堂にて

博物館海外調査報告

兼清 順子

(平和教育研究センター運営委員 / 学芸員)

2017年4月7日と8日、国際平和博物館会議への参加途上にロンドンに立ち寄り、Jewish Museum London、Museum of London、Imperial War Museumを訪れ、第二次世界大戦やホロコーストといった人類の負の遺産ともいえる歴史の展示を見学しました。

1. 第二次世界大戦

ロンドンの市内中心部にある Museum of London は、45 万年前から現代までのロンドンの歴史を伝える博物館です。訪れた金曜午後は、小さな子ども連れの地元家族で賑わっていました。「近代のロンドン：1850-1940：人々の街」と「近代のロンドン：1950年代から今日：世界都市」の間を繋ぐように配置された第二次世界大戦展示は、物資の統制、アメリカ兵とロンドン女性たちの出会いなどを取り上げています。空襲で投下された爆弾、疎開なども展示していますが、戦争によってもたらされた死や苦悩が生々しく描かれたものではありませんでした。二つのエリアを繋ぐ展示設計は、第二次世界大戦を時代の流れを変えた要因として位置づけることを強調するものでした。解説も、戦争はロンドンに社会的な変革をもたらす契機となったと結んでいます。

Imperial War Museum は、イギリスが関わった近代的な戦争の歴史を伝える博物館組織のなかの一館です。ロンドン館は、第一次世界大戦、第二次世界大戦、冷戦の時代、その後の



Jewish Museum London のホロコースト展示室の様子 (HP より転載)

戦争や紛争、平和維持活動、ホロコースト、叙勲者の顕彰を中心に展示を展開しています。建物正面に据えられた巨大な大砲や、館内中央ロビーの吹き抜けホールにつるされた戦闘機や飛行機、フロアから飛び出すように設置された車や船が、一瞬で来館者の目を奪います。来館層は小さな子ども連れから老夫婦までの幅広い年齢層、市外や国外からの来館者も多い様子が見てとれました。第二次世界大戦の展示は、戦争の経過と兵器が中心で、展示物の多くは飛行機やバイク、銃などです。銃後の様子を伝えるため、ある労働者階級の一家の戦時生活を紹介する展示もありますが戦況と家族の物語はそれぞれ別個の展示として完結しており、総力戦の全体像が見えるものではありません。これは特に、第一次世界大戦展示との比較により極立ちます。イギリスでは、最初の総力戦であり想定外の被害を出した第一次世界大戦がその後の戦争に関する表象を形作るものとなりました。第一次世界大戦の展示は、戦争の背景、戦闘の経過、毒ガスや塹壕戦の惨状、各部隊の戦闘、国民の総動員のために作られた大量のプロパガンダ、兵士に送る慰問品、兵士が家族に送った手紙、戦場での兵士の日常や苦悩、シェルショックなど、これまで総力戦を取り上げる上で論点とされてきた内容をふんだんに盛り込んだものでした。写真も多用し、手紙や手記などを通して兵士の姿を描き出そうとする様子も伝わります。日本からの見学者として興味深く感じた点は、冷戦時代の展示の中に、黒焦げになったマネキン（原水爆の被害を示唆するアート）が含まれていることです。キャプションにも、このアートが多くを想像させると記されており、被爆地の写真などを展示することができない状況でアートによる想像力でこれを突破しようとしていると感じられました。また、People Power と題した平和運動に関する特別展も開催されており、その中ではイギリスで盛んになった核兵器廃絶を訴える平和運動の歴史も紹介されていました。

2. ホロコースト

Jewish Museum London はロンドンにおけるユダヤ系の人々の歴史と、ユダヤ教や文化について紹介する博物館です。歴史のフロアの最後にはホロコーストを生き延びたユダヤ系イギリス人 レオン・グリーンマンについての小さな展示室があります。グリーンマンは、オランダ在住時に妻と息子をアウシュヴィッツに送られて殺害され、自身は6か所の強制収容所へ送られました。展示室中央の立体ケースには、レオンの囚人



Imperial War Museum のロビーの様子

服、妻のドレス、息子の服とおもちゃが展示され、家族のシルエットを浮かび上がらせませす。また、部屋の周囲は関連資料（ダビデの星や、強制収容所で使っていたスプーンなど）とともにレオンの結婚から解放までの流れ、複数のホロコーストサバイバーの証言映像、解放後にレオンがBBCに証言をした音源とレコードが展示されています。この展示には、死体等を写した場面の写真はありませす。レオンの体験を子どもも抵抗無く受け止めることができる範囲でホロコーストを描いていませす。戦前の幸せな家族の様子を浮かび上がらせ、ホロコーストの最中の出来事を淡々とつづり、戦後も苦しみを超えて証言を続けた姿を描き出す、コンパクトな展示は子ども向けのホロコースト展示のお手本のようでした。見学中、最初は、祖母と孫と思しき二人組が展示を見学した後に二人でベンチに座り証言映像を見ていました。あまり言葉を交わしている様子はありませんでした。その後、高校生の団体が訪れ、展示室は雑談の嵐に飲み込まれました。

Imperial War Museum のホロコースト展示は、これとは対照的に、ホロコースト研究で定説となっている歴史の全貌を伝えることを目指す展示でした。展示は2フロアに渡り、第一次世界大戦後のヨーロッパの状態とナチスの台頭、ユダヤ人商店のボイコットやニュルンベルク法の導入、ユダヤ人のドイツ脱出ラッシュ、クリスタルナハト、ポーランド侵攻、独ソ戦初期の組織的な殺戮、ゲッターへの囲い込み、ユダヤ人の移住計画、ホロコーストに関わった命令系統、輸送、絶滅収容所、解放、サバイバーの証言映像と、ホロコースト研究の著作集のような構成です。各段階の特徴はパネルや資料だけでなく、演示を通して伝える工夫も明確です。例えば壁面は、導入部分は白木、最初のフロアは赤、階下のフロアは黒、解放後は白木に戻ります。また人種主義による差別や輸送に関することは後年のインタビューによる証言映像でも伝えていますが、アウシュ

ヴィッツへの到着や強制収容所での生活については、映像を使わず音声のみで証言をきかせませす。東部での組織的な殺害の様子を伝える写真は衝撃的でしたが、更に多くの死体の画像を見ることになるのは、解放後の展示です。解放前の写真は圧倒的に少ないことありますが解放後にとられた写真は世界に衝撃を与え、拡がったことが反映されていること、また展示の途中で直視できないと拒絶反応されては最後までメッセージを伝えることができなため、先へ進ませる工夫の面もあるのではないかと感じさせられました。レセプションで、50代から60代の男性が、「妻がホロコースト展示の中で気分が悪くなったが、すぐに外に出ることができなかつた。すぐに展示室から出たい人のために通路を作ったほうが良い」というに場面に遭遇しました。受付側は、「迂回ルートのサインはありますし、これまで20年間、そういったトラブルはありませんでした。でも、上の者に伝えておきます」と対応していました。

強制収容所への輸送に関する展示では、貨車を模した展示空間の間隙から、アウシュヴィッツの真っ白な模型が見える仕掛けになっています。そしてこの模型の展示では、周囲を回って最後にガス室の写真にたどり着く構成になっていますが、貨車でアウシュヴィッツに到着し、ガス室に送られるよう選別された人々は、鉄条網に囲まれ、周囲を取り巻くように大回りしてガス室まで歩かされました。このように証言や体験が演示の中に取り込まれていることを感じさせる展示になっています。強制収容所についての証言の演示に現在のインタビュー映像が使われないことは、そこでの体験について、現在の映像では語れないものであることが物語られています。

今回見学した全ての展示は、目的を明確に意識した、展示の組み立てになっていました。ホロコーストに関する二つの展示は、更にそれにふさわしい演示が吟味されて計算されています。展示を通して体験や歴史を伝えるために博物館が演示の細部まで精密して作られた様子が強く印象に残りました。

平和運動の記憶

徳久恭子

(国際平和ミュージアム運営委員
/ 法学部教授)

デモは怖い。デモに参加する奴の気が知れない。学生一人が声を上げたって社会は何も変わらない。皆さんは、そんなことを思ったことはありませんか。国内では、若者がデモに参加することは少ないように思います。しかし、海外に目を向けると、民主化を求める運動、LGBTの権利を求める運動、経済状況や労働条件の改善を求める運動などに若者の姿が見られます。彼・彼女らにとって、デモは問題を喚起し、その意義を社会に広く問うたり、解決を探ったりする手段たりうるようです。

日本でも、1980年代までは、労働運動や学生運動、市民運動などがさかに行われ、大小さまざまな規模で集会やデモが行われていました。なかでも、平和運動は多くの関心と参加を呼び込みました。平和主義は、戦後日本を支える価値であり、日本政治の主要な争点の一つでもありました。

ところが近年、平和の問題は変質しつつあります。戦争を直接・間接的に知る人が減ることで価値の共有が難しくなってきたこと、テロの脅威といった、これまでにない問題が発生してきたこと等、複数の理由が考えられます。そこで、今回は、敗戦後の日本で、人々がどのように平和を擁護しようとしたかについて、少しばかり振り返ってみたいと思います。

戦争の傷

「焼夷弾はきれかったよ。」小学5年生の夏休み、戦争体験を聞き書きする宿題を出された私は、祖母から予期しない言葉を聞きました。夜間、低空からの無差別攻撃で、大阪市内の密集した木造住宅が次々と焼けていく光景を綺麗と表現したのは、なぜだろう。あの時、それを聞けずにいたのは、いつもは明るい祖母が遠くを見るように話したこと、そして、その空襲で背に負った子どもを亡くしたことを訥々と語ったからかもしれません。祖母の表現は、自身では決して消化することのできない体験を転嫁することで、書き換えられた記憶を再現していたようにも思えます。

戦争はそれほどまでに、市井の人々の日常を奪い、傷を残します。

戦後に、多くの人が平和運動に参加したのは、彼・彼女らの経験によるところが大きいといえましょう。のみならず、戦後生まれの世代にとっても、戦争の残像は身近にありました。私の両親に聞いても、白米を食べることが難しい時期もあったといえますし、栄養失調を改善する目的で学校給食に出された脱脂粉乳は不味かったと大笑いします。「子どもの頃は傷痕さんが町にいたよ」と天王寺の近くで育った母が述べるように、都市には、傷痕軍人が軍帽に白衣姿で街頭に立ち、募金を集める姿が見られる等、生活風景に戦争の傷痕がありました。

講和と再軍備問題

くわえて、冷戦は戦争の脅威を忘れさせませんでした。米国政府は、冷戦の進展を受け、日本の再軍備を検討しましたが、1950年6月25日に勃発した朝鮮戦争を契機に具現化します。一方、国内では、再軍備に反対する声が各所で挙げられました。なかでも、戦前に国家主義と軍国主義の台頭を抑止できず、時に転向さえした知識人たちは、強く反発しました。岩波書店の編集長・吉野源三郎が呼びかけ、安倍能成、大内兵衛、久野収、清水幾太郎、末川博、丸山真男ら50名ほどの知識人が参加した「平和問題懇談会」は、1950年1月15日に、全面講和、中立不可侵、軍事基地供与反対の声明を出し、西側諸国との単独講和と日米安全保障条約の調印を目指す吉田茂政権に再検討を促そうとしました。

理想的な国際秩序の創造を求める姿勢は、突如として現れたわけではありません。日本の非軍事化は、ポツダム宣言受諾により自動的に行われました。しかし、日本国憲法第9条に掲げた平和主義は、帝国憲法改正案委員小委員会で、鈴木義男の発案に従い、挿入されました。正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求するという日本人の思いは、それほどまでに強かったのです。

とはいえ、平和問題懇談会に参加した知識人の思想や立場は同じではありませんでした。社会運動と距離をとる者が複数いる一方で、末川博や久野収、清水幾太郎らは、学者と民衆が連帯して平和運動を推進する必要を重ねて説きました。平和に対する強い思いを抱いた個人が主体的に参加することは、民主化の糧になると見る彼らは、総評や日教組に働きかけ、各種団体との連携を深めながら平和運動のうねりを高めることを期待しました。

1951年9月1日に総評が開いた平和国民大会には、2万人もの人が参加し、全面講和や再軍備反対を訴えました。平和運動は、2つの条約が発効して以降も続けられました。米軍の駐留継続と自衛隊発足により、国内では基地の拡張が見られましたが、それをめぐる反対運動が全国各地で生じることになります。



館長室で署名簿を整理する婦人たち 1954年（杉並区立郷土博物館蔵）

母親たちの平和運動

1954年3月1日には、アメリカがビキニ環礁で行った水爆実験に日本のマグロ漁船「第五福竜丸」が巻き込まれ、被爆する事態が発生しました。この事件を受け、東京都杉並区の読書サークル「杉の子会」に参加した主婦たちは、子どもの命や将来に係る問題に無関係でいられないとして、水爆禁止の署名運動を始めました。同様の動きは、杉並婦人団体協議会にもみられました。主婦を中心とする活動は、開始からわずか1か月で杉並区の人口の約7割を占める、26万6,000人ほどの署名を集めるほどだったといいます。この運動は全国に広がりを見せ、署名集計は3,000万人を超えました。母親たちの試みは、世界にも共感を呼び、運動の輪を広げました。それが、1955年8月6日に、広島で第1回原水爆禁止世界大会を開催する原動力となっていきます。

子どもの暮らしと未来を守りたいという母親たちの思いは、これに留まりませんでした。全日本婦人団体連合会の初代会長平塚らいてうは、日本の女性たちの思いを国際民主婦人連盟に訴えました。連盟はこれを支持し、1955年7月に世界母親大会の開催を決めます。平塚らは、それに呼応して日本母親大会を組織します。日本母親大会は、現在も続けられ、平和問題、保育・教育問題、公衆衛生（予防接種問題）、公害問題、物価問題など生活に携わる各種の問題に取り組んでいます。

草の根運動の盛衰

地域住民が手と手を取り合って、平和問題を語り合ったり、生活環境の改善に努めたりする運動は、1960年代に入っても続けられました。産業化が進み、分厚い中間層が生まれつつある中で、夫は都心に働きに出、妻は郊外の住宅で家事とケア労働を担うというライフスタイルが一般化したことで、女性たちは、社会問題を改善する主たる担い手となりました。

高まり続ける快適な住環境需要を充たすために、開発された団地や新興住宅街では、主婦のサークル活動が広がりを見せました。家事のスキル向上をめざすもの、スポーツや文化活動、女性の自立や社会問題を扱ったりするもの、原水爆禁止運動・ベトナム反戦運動・発展途上国への支援活動などと、その内容はさまざま、団体間の連携も強く、いわゆる重複メンバーシップが多様な活動を支えたといえます。

ところが、そうした運動も1980年代に入ると徐々に変化します。生活問題や平和問題を争点化し、その解決を担ってきた女性たちの労働市場への参入が高まったこと、趣味や娯楽の個人化が進んだこと、冷戦の終焉や世代交代等により平和問題への関心が低下したことなどが、社会運動を非日常的なものに変えました。

他方、国内では、1995年の阪神淡路大震災を契機に、非営利団体の結成が増す等、市民活動の新しい地平が開けています。ただし、それらは、政府部門の縮小を補填する社会福祉、教育、防災、防犯といった活動を担うものが多く、世界平和や人道的支援等の問題に対する市民的関与は、かつてほど高くないように見えます。

語り継ぐこと

しかしそうは言っても、平和な世界の構築は、私たちが安寧な日常を送るうえで欠かせません。貧困や多様性に対する不寛容などがテロの引き金にもなるグローバル化した社会では、相互理解を高め、社会的包摂を実現することが、平和の礎となります。

では、私たちに、何ができるのでしょうか。世界平和のために、想像することから始めてみよう。ジョン・レノンの詩が歌い継がれるのは、そこに本質がありながらも、実現困難だからかもしれません。まずは知ること、そして、それを誰かと共有するために語る。他者の立場から物事を見つめ直すこと。単純に思えて、容易でないことを実行する感度を高めることが期待されていると思うと、人は躊躇してしまいます。そんな私たちを博物館や美術館、図書館は助けてくれます。

現在を見つめ、未来を創造するために、過去を知る。そんな機会を得るために、ミュージアムの扉を開けてみませんか。

『アトキンス 物理化学（下）第8版』

P. W. Atkins, J. de Paula 著

千原秀昭 中村巨男 訳

東京化学同人 2009 年



本書は、多くの大学で物理化学の教科書や参考書として使われているものと思われ、特に理系の学生や院生に推薦したいと思います。

ここでは、本書の分光学に関する二つの点について、紹介します。

一つ目は、パルスレーザーを発生させるモードロッキング法についてです。N 個のモードを重ね合わせてつくった波（放射線）の式とその強度の式との概要が本書に書かれていますので、詳しい計算を行って、これらの式を導出してみるのはいかがでしょうか。また、本書の図 14・34 に、発生するパルスのモデル図（縦軸は波の強度、横軸は時間）が載っていますので、これに相当する図を先に導出した式（N などはパラメーター）を使って実際に描いてみてはどうでしょうか。パルスレーザーについて実感できると思います。

二つ目は、核磁気共鳴（NMR）におけるスピンスピンカップリングの起源についてです。なお、NMR は、身体の診断に使われている磁気共鳴画像診断装置（MRI）による診断法の基礎原理です。さて、この起源として分極機構の説明が本書に図 15・20 を用いてなされていますが、本文の記述内容はやや分かり難いのではないかと思います。そこで、全体の説明図として下図を描いてみました。この図で左上の部分の本書の図 15・20 に相当しますが、下図を参考に、分極機構について考えてみてはいかがでしょうか。なお、今回この原稿を書くにあたり、本学大学院生命科学研究所応用化学コース博士課程前期課程 1 回生の松濤大智君に、私の手描きの図を基に、下図を描いてもらいました。

小島一男

（国際平和ミュージアム運営委員 / 生命科学部教授）

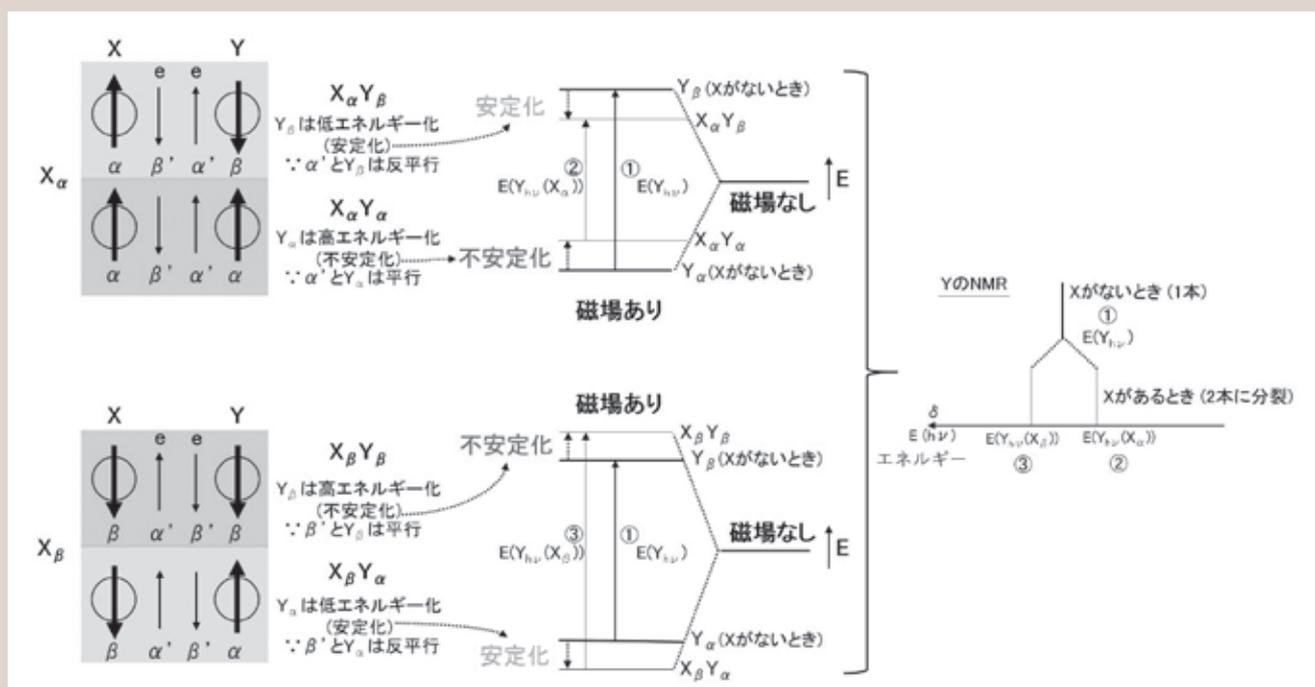


図 $^1J_{XY}$ (Y の NMR を測定する ($Y_\alpha \rightarrow Y_\beta$ 遷移)。Y の NMR に対する X の効果)

25 周年記念事業

国際平和ミュージアムは今年開設 25 周年を迎えました。当館は「平和創造の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者をはぐくむ」という理念にもとづいて設立され、地域社会やグローバル社会と連携し、戦争の歴史に真摯に向き合い平和構築に向けた取り組みを実践してきました。昨年は来館者 100 万人の達成、平和教育研究センターの開設、ミュージアム次期リニューアルの検討と、2020 年以降を展望した次世代型の新たなミュージアム創造に向けた起点の年となりました。25 周年にあたって、大学が四半世紀に渡って平和博物館に関わってきた歴史的意義を踏まえ、今後も社会教育機能の充実と平和教育研究活動の成果発信・還元をめざします。

国際平和ミュージアムは毎年約 5 万人の来館者があり、来館者の大多数を占めるのは小中学生です。来館した小中学生は自分たちが生まれる前からここにミュージアムが存在しているということに、驚きを隠せない場面に出会うことも多くあります。また、昔をよく知る来館者にとっては、まだまだ 25 年、これからも長く存在してほしいとお声かけいただくこともあります。大掛かりなセレモニーは予定していませんが、「ミュージアム 25 周年記念特別ポスターコレクション 1992-2017」を開催し、ミュージアム 25 年間の軌跡をたどりました。ミュージアムに何度も足をお運びいただいた方には懐かしく、そして初めてご覧いただく方にはミュージアムの歴史をそれぞれに感じていただく機会となりました。これからも来館者の皆様にご満足いただけるよう尽力したいと思います。

さて 25 周年を記念し、開館当時から使っているロゴマークをもとにした 25 周年記念バナーを作成しました。5 月 1 日から国際平和ミュージアムのエントランスに設置し 25 周年を迎えたことを来館者の皆様へアピールしています。この一年限りの限定バナーですので、ご来館の際には少し気にとめていただくとともに、ぜひ一緒に記念写真をお撮りいただければと思います。

現在ミュージアムには職員が 16 名、ボランティアガイド 66 名、学生スタッフ 65 名が勤務しています。これらのスタッフは 25 周年のロゴの入った缶バッジをつけて勤務、ガイドをおこなっています。ぜひ、注目して見てみてください。こちらもバナー同様、開館当時からロゴからデザインされたものです。

来館者の皆様にも 5 月 19 日からの 3 日間 25 周年記念グッズを配布しました。記念グッズは 2015 年秋に作成・配布をしてご好評をいただいた平和の缶バッジの復刻版 4 種類と、今回は付箋メモ帳も作成し全 5 種類を配布しました。小学生以下の来館者には缶バッジを、中学生以上の来館者には付箋メモ帳を配布しました。



立命館大学国際平和ミュージアム
開館 25 周年



Anniversary
since 1992



Hyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University



25 周年記念グッズについてはご好評をいただいたので、夏季、秋季にも配布期間を設けようと計画中です。配布日については国際平和ミュージアムの HP や Twitter をご確認ください。

今後のスケジュールとしては、国際平和ミュージアムの元学生スタッフのみなさんへのホームカミングイベントを企画中です。2004 年から運営にかかわった元学生スタッフは現在 200 名を超え、日本のみならず世界中で活躍しています。25 周年をきっかけに彼らとの結びつきをさらに強くもち、今後のミュージアムの活動に生かせればと考えています。

最後に、25 周年を迎えた国際平和ミュージアム、そしてスタッフ一同、みなさまのご来館を心よりお待ちしております。

2017年度春季特別展 KYOTOGRAPHIEアソシエイテッドプログラム 「DAYS JAPAN フォトジャー ナリズム写真展」

会 期：2017年4月15日（土）～7月9日（日）
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム1階 中野記念ホール
参観者：9,791名
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
協 力：DAYS JAPAN
後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員
会、京都市内博物館施設連絡協議会、KBS 京都、朝日
新聞社、京都新聞、毎日新聞社、読売新聞社

現在の日本におけるメディアのあり方を問う DAYS JAPAN は、戦争、貧困、環境問題など現在起こっている様々な問題を私たちに伝えています。DAYS JAPAN が開催する「DAYS 国際フォトジャーナリズム大賞」は、日本ではじめての本格的な国際レベルのフォトジャーナリズムの賞です。人間と自然の尊厳が奪われていることを告発する作品、人間と自然の尊厳を謳い上げる作品、心温まるストーリー、自然と動物のドキュメンタ

リー作品の部門から審査が行われています。本展は、これまでの受賞作品を展示し、世界が抱える問題とそこに生きる人々の姿を知り、いま一度、平和とは何かを考えるきっかけにしたいと大きく開催しました。

また、DAYS JAPAN 写真展は「一枚の写真が国家を動かすこともある」と題して、京都新聞会場でも4月15日（土）～5月12日（金）同時開催されました。

* KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017 第5回テーマ「LOVE」
4月15日（土）～5月14日（日）京都市内16会場にて国内外の重要作家が参加する国際的な写真祭



展示会場の様子

見学者の感想 アンケートより

◆他国の出来事から日本の問題まで、私が普段目にするメディアでは見たことのない内容ばかりでショックを受けました。海外の写真について自分の背景知識が少なかったのですが、DAYS JAPAN さんの説明文のおかげでより写真の中で起きていることが身近に感じられました。（10代 学生）

◆目を背けたくなるような光景だったが、目を背けてはいけなと感じた。自身にできることを考え、少しずつでも行動していきたい。（20代 学生）

◆自分たちの暮らしている世界とは何なのかということについて考えさせられました。知らない幸せもあるかもしれませんが、知らない怖さもある。あえて目を向けることで、平和とは何なのか今一度考えることができ良かったです。（20代 学生）

◆自分が今まで考えていなかった普段の暮らしの向こう側にあった様々な写真に衝撃を受けました。（20代）

◆写真の力を感じた。本で読むよりも、ずっと鋭く胸に突き刺さってきた。（10代 学生）

◆正しい情報を知ってそれについての行動をおこすことが大切と思った。（70代）

◆解説もわかりやすく、それ以上に写真のもつ力に驚きました。中でも、小さな子どもたちが学校にも行けず危険な仕事をし、血だらけで泣いている写真には心を痛めました。普段、日本にしていると実感することはありませんが、世界ではこういうことがたくさん起きていると知ることが大事なのかなと思います。この特別展を通じてもっと世界の状況に目を向ける必要があると感じました。（20代 学生）

◆遠い国での出来事が自分の身近なことから始まっていたり、メディアでの情報では何も感じられない事実が写真を見て苦しく感じた。日本に戦争はないけれど無関係ではなく、豊かだけどその裏に何かがあるのかしらないことを恥ずかしく思った。（10代 高校生）

■関連企画

映画上映会 & 広河隆一氏講演

ドキュメンタリー映画『広河隆一 人間の戦場』

98分、監督：長谷川三郎 2015年

日時：2017年5月4日（木・祝）13:30~16:30

会場：立命館大学衣笠キャンパス充光館 301教室

講師：広河隆一氏（フォトジャーナリスト）

参加者：198名

本講演では、パレスチナやチェルノブイリでの取材、チェルノブイリや福島の子どもの被曝低減と保養、甲状腺がん検査をはじめとする、広河氏のこれまでの活動を追った長谷川三郎監督によるドキュメンタリーの上映後、広河氏に登壇いただきました。広河氏は、こうした取材の経緯や、ジャーナリストの使命として人が生きる権利を全うするために必要となる知る権利を追求することについて語られました。大学卒業後にイスラエルの農場に入った広河氏は、中東戦争で破壊されたパレスチナ人の村で、外国人ジャーナリストの存在は抑止力であり、起こってから来たのでは遅すぎると訴えられ、ジャーナリストの役割に思い至りました。その経験を得て、1982年の第一次レバノン戦争では、イスラエル軍に包囲されたパレスチナ難民キャンプに単身入り込みましたが、そこで目にしたのは見せしめに虐殺された難民の姿でした。即座にこれを世界に発信しようと奔走しましたが通信手段は封鎖されていました。しかし、イスラエル軍の電話を利用して、これを世界に伝えたメディアもあったことを知り、たとえ全てが封鎖されていてもジャーナリストには進むべき道があると考えさせられる契機になったと広河氏は語りました。

会場は198人の聴衆で満席となり、来場者は、「ジャーナリストである前に人間である」という姿勢で続けられる取材活動や、事故後6年を経ても教訓が生かされず原発の危険がただ隠蔽されようとする潮流への警鐘に真剣に聞き入っていました。

■映画上映会

「ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償」

93分、監督：アンドリュー・モーガン 2015年 アメリカ

日時：2017年6月29日（木）18:00~19:30

会場：立命館大学衣笠キャンパス充光館 301教室

参加者：72名

華やかなファッション業界の裏側、向かうべき未来を描き出すドキュメンタリー映画を上映し、授業が終わった学生や仕事帰りの方などがご参加下さいました。

—参加者の感想—

◆劣悪な環境を変えるために、例えばファストファッションの不買活動をしたとしても、大企業はもっと価格を下げて、私たち消費者を誘惑し、そして、私たち消費者はその誘惑に負けてしまうんだろうと思うと、虚無感を覚えました。根本的な改革…なんだろう、今の私には思いつかないですが…。企業のオーナーたちは、実際に作られている現場をみているのか、疑問に感じました。 (30代 会社員)

◆ファストファッションをつくることで多大なリスクがあるんだと分かりました。子供にまでも影響がでてきているなんて予想もしていなかったので驚きました。これからの私生活で改善で



広河隆一氏

—参加者の感想—

◆ジャーナリストの仕事を全うするだけでなく、人間として保養施設の建設までされているその活動には脱帽です。広河さんは本当に自分の命より他人の命を尊重することができるのだなと感心します。今、日本のジャーナリストの環境は決して良いものとは言えません。フリーの方が多いため、命を保障してくれる人は誰もいません。未来のジャーナリストがより自由に、より事実を知ることができることを祈ります。またいつか世界中に平和が訪れることを祈ります。 (10代 学生)

◆「ジャーナリストとは、ただ起こった事実を記録し世界に伝えるのではなく、争いをとめる抑止力になる」という言葉が最も印象に残りました。 (20代 学生)

◆広河さんの温かい言葉の数々に心打たれました。ジャーナリストとは？まず温かい血の通った人間であること。これがカメラを通して人に訴える力を与える。涙と共に人々と寄り添い決して非情なカメラマンではないこと。被対象者が心を開くのでしょうか。ご自分の命の危険をかえりみずフォトを送りつけて下さる広河さんに敬意を表します。 (70代 無職)



映画上映会の様子

きることは何か考え自分を変えていきたいです。(10代 学生)

◆以前から、バングラデシュなどにおける過酷な労働について調べたことがあり、興味があったので観に来ました。私たちの身の周りでは簡単に、安価に手に入ってしまう物は、途上国の人々が低賃金で命懸けで作ったものであるということを常に頭にいた上で、買う物を選ぶ必要があると強く感じました。また、この問題は企業はもちろん、先進国をはじめとした国際社会が見過ごし続けてきたことで起きていることだと思うので、私たちがこれに真剣に向き合えば解決は程遠いと思います。 (20代 学生)

ミニ企画展示

第106回

第22回京都ミュージアムロード参加企画 「京都と空襲」

会期：2017年2月4日（土）～3月26日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

京都市内博物館施設連絡協議会、京都市教育委員会

「空襲」とは、爆弾の投下や機銃掃射などで、空中から地上の目標を襲撃することです。一五年戦争末期には、京都の町も数回の空襲を受けましたが、焼夷弾による多大な被害のあった大阪や東京の空襲と違い、あまり知られていません。

1945年1月、東山区馬町付近への爆弾の投下が市内ではじめての空襲でした。100名近くの死傷者や建物被害が発生しました。その後、夏までの間に確認されているだけでも市内7か所に爆弾が投下され、86人の死者がでました。

ミュージアムから南東へ約1.5kmほどの上京区西陣も1945年6月に空襲を受けました。この空襲で被災した磯崎幸典さんは、当時の体験を後世に語り継ぐ活動を長年続けています。今回の展示では、あらためて磯崎さんにお聞きした空襲後の町の様子や復興活動などの証言を映像で記録し、磯崎さん所蔵の爆弾の破片とともに紹介しました。その他、馬町空襲の被災状況を捉えた写真や当時の日記などの空襲関連資料、空襲に備えた銃後の暮らしの関連資料を展示し、無差別に攻撃をする戦略爆撃では常に一般市民が犠牲となることを今一度考えさせられる内容となりました。



第107回

「熟覧Ⅱ—メディア資料室への誘い—」

会期：2017年4月1日（土）～5月28日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

博物館の資料を閲覧室などで丹念に詳しく見ることを「熟覧」と言います。本展は昨年の開催に続き、2005年に開設した国際平和メディア資料室の魅力伝える企画の第2弾として開催しました。今回は、ミュージアムで活動する学生スタッフとサービスマーケティングを行った短期留学生らによる図書や資料の紹介を中心に、資料熟覧の魅力伝える内容となりました。

国際平和メディア資料室は、ミュージアムの開館時間に準じて開室している図書資料室です。どなたでも無料で利用することが出来ます。現在47,000点のミュージアムの展示に関する図書・雑誌資料・AV資料を所蔵しています。児童書や漫画、日本近現代史の概説書などの一般書をはじめ、調査・研究向けの専門書や学術雑誌、戦時中の国策雑誌や紙芝居などの資料から戦争と平和へアプローチできます。

また、戦争の被害や加害の体験をつづった手記の私家版など、一般の図書館では残りにくい資料を中心とした「一五年戦争体験文庫」を新たに設置しました。引き続き収集していますので、文庫への資料寄贈がありましたら、是非ご相談ください。



第108回

ミュージアム・この1てん「もうたくさんだ」

会期：2017年6月1日（木）～6月30日（金）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

毎年6月23日は沖縄県の慰霊の日とされ、この日の前後には各地で沖縄の戦争犠牲者の追悼と平和を希求する行事が行われています。これにあわせ、沖縄戦をテーマとした儀間比呂志氏の版画作品を展示しました。

一五年戦争末期の1945年3月、アメリカ軍が沖縄に上陸し、「鉄の暴風」と呼ばれる地上戦が始まりました。空襲や艦砲射撃に加え、銃や火炎放射器による激しい無差別攻撃により、県民の4分の1にあたる12万人が犠牲となりました。その多くが戦闘に動員された民間人や老人、子どもを含む一般住民でした。

本作品は、儀間比呂志氏が初めて沖縄戦をテーマとした版画作品25点中の1つです。それまでは、沖縄の風土や人びとの暮らしを描いてきましたが、1970年頃に『沖縄縣史』の沖縄戦体験記録に出会い、この一連の作品に取り組みました。沖縄戦を体験していない儀間氏は、ガマ（洞窟などの壕）での追体験や証言者たちを訪ねるなどし、戦争に巻き込まれた多くの住民の声を聞き、その思いを表現してきました。

2017年4月11日に94歳で亡くなるまで沖縄戦を描くことをライフワークの一つとし、個展や出版で作品を発表してきました。

本展は、当館所蔵の儀間比呂志作品68点を公開する2017年度秋季特別展「儀間比呂志版画展—沖縄への思い—」のプレ企画画として開催しました。特別展の詳細は、本誌P19をご覧ください。



ビデオキャンペーン 2017

今春、ミュージアム学生スタッフへのインタビューを通して国際平和ミュージアムの隠れた魅力を紹介するPRビデオを制作しました。2F 展示室で活動する学生スタッフ4名が、それぞれミュージアムで働くようになったきっかけや仕事の内容などを生き生きと語っています。昨年10月から学生ボランティアとしてミュージアムで活動した郭雨培さん（グオ・ユーペイ、同志社大学・京都アメリカ大学コンソーシアム/イェール大学社会学部3回生）が起案し、撮影、編集をおこないました。ビデオはSNSやミュージアムHP等で配信されています。こちらでもご覧ください。

https://youtu.be/_rlh3H5IBUU

なお、見学に訪れた立命館守山中学校のみなさんに撮影のご協力をいただきました。ありがとうございました。



グオさん（左から2人目）から企画の概要を聞く学生スタッフ

2017年度前期 NGO ワークショップ開催報告

「難民・国内避難民×イラク～JVCと現地 NGOインサーンのイラク中北部キルクーク市での取り組みについて～」

日時：2017年6月14日（水）16:30～18:00
場所：立命館大学国際平和ミュージアム2F会議室
講師：池田未樹氏

（日本国際ボランティアセンター（JVC）イラク事業担当）

国際平和ミュージアムでは平和教育普及活動の一環として、外部より講師を招き、ミュージアムで活動する学生スタッフの企画によるワークショップを開催しています。ワークショップに先立って企画メンバーが開いた勉強会では、難民問題に取り組む学生団体「パステル」を招いたレクチャーや、「難民」をテーマに「さいころくん」を用いた案内文を考えるグループワークなどをおこないました。

当日は学内外から30名を超える学部生・大学院生が参加し、講師の池田氏より写真や映像を交えたレクチャーを受けた後、4グループに分かれ、身体を使った「非暴力トレーニング」と呼ばれるグループワークをおこないました。参加者はお互いのことを知り、信頼関係を強め、非暴力的な生き方の糸口を学ぶとともに、頭では平和を構築したいと考えていても、実

参加した学生の声

ビデオ企画に参加して4ヵ月が経ちました。この4ヵ月間でも、またたくさんの新しい友達に会い、たくさんの新しいことを学びました。皆さんにもぜひ来ていただきたいと思います。ここでは、いつも新しい発見があります。（李晨 言語教育研究科 M2）

自分が出演しているところを見るのはとても恥ずかしかったですが、全体の感想としてとてもよく出来上がっていたと思います。実際に学生に向けて説明しているシーンや、働いているシーンなどがあり、見ている人もミュージアムがどんなところか、という具体的な内容を知ることができると思います。働いている学生がミュージアムの魅力について語ることで、それが視聴者にも伝わったのではないかと思います。

（塩足怜奈 国際関係学部3回生）

制作：郭雨培

協力：田中千尋、工藤貴明、塩足怜奈、李晨

製作・著作：立命館大学国際平和ミュージアム

©立命館大学国際平和ミュージアム 2017年

際には身体がそれを拒む動きをすることがいかに多いかということ学びました。

イラクの子どもたちは生まれた時から紛争の中に生きていて、平和だった頃のイラクを知りません。そのため子どもたちは平和教育を通して、肌や髪の色などの違いのために憎み合うのではなく仲間として共生すること学んでいます。池田氏はイラク人が製作したアニメーションビデオの教材などを紹介しながら、平和教育の重要性とともに、日本の人々にもっとイラクのことを知ってもらいたいと語りました。参加者からは「平和教育への気持ちが強く伝わり、イラクに行ってみたくなった」「現地目線で学びていきたいと強く思うようになった」という感想が聞かれました。



グループワークでの発表の様子

伝える努力を続けたい

馬場 央

(国際平和ミュージアム ボランティアガイド)

立命館大学国際平和ミュージアムにおいて、市民のボランティアとして活動の場が開始されてより、微力ながら今日まで無事に参加させていただけましたことを本当に感謝いたしております。

私は琵琶湖のほとり滋賀郡和邇村南浜の42軒の集落で生まれました。1931年生まれの私は15年戦争を実体験したことになります。太平洋戦争が小学校4年生で始まり、女学校の2年生まで戦争というものを五感で感じ取り身の引き締まる思いでした。そんな中で7歳の時の日中戦争の思い出は「南京陥落の提灯行列」です。暗がりの道に美しい提灯の行列「南京陥落バンザイ」の音が今でも耳に残ります。戦勝をお祝いしたことはこれ以降ありませんでした。

太平洋戦争においては1944(昭和19)年女学校1年。戦局が厳しくなり「国民総動員令」が出された頃からの記憶がよみがえります。防火演習、避難訓練、竹やり訓練、食糧増産、隣組の結束が叫ばれ、大都市の空襲が始まり、農村地方に疎開する人が増えてきました。名古屋、京都、大阪の方々が来られ、学童は大阪から50名程度近所の寺に収容されました。幼い命を預けられたお寺では、難局を乗り切る為に愛国婦人会の会合が開かれました。子どもたちにひもじい思いをさせないように食料の援助、風呂当番、調理の当番制などが考えられ、子どもたちを無事を守ることに話合つたと母がいました。母はいつも「こんな小さい子どもが苦勞してかわいそうだ」といいましたが早く戦争が終わればよいのとは一言もいいませんでした。禁句はどんな時にも使いません。

1945年、女学校2年の時には「学校授業の1年間停止」が決まり勤労働員に出勤しました。男手の足りない家に出向き湖西の農業生産者の家で農作業に従事しました。田んぼに入り、苗取り、田植え、麦刈り、草取りなどどんな作業もいとわ

ず一生懸命になって働き、みんなで必勝の願いを込めてやり遂げました。昼食に出された「さつまいも入りおにぎり」を頂けたことも忘れることはできません。上級生は軍需工場に出勤され、飛行機の部品製造にたずさわって集団生活で寝食を共にするという団結ぶりで国の非常時体制に服され生産向上に努力されました。東洋紡績が工場になっていたということでした。

国をあげての決戦体制において流行語は「月月火水木金金」という海軍軍歌でした。海軍には日曜がないのだ！我々も続け！という覚悟です。「鬼畜米英」という四字熟語も反米英に対する思いが極度に達していました。そんな中で時局を収拾されることなく暗澹たる思いで国民は沖縄の決戦を迎えたのです。6月頃、父に召集令状が届き、父はうやうやしく頂きました。徴兵検査では「第2乙」だった父は戦場に行った友達をうらやましく思っていましたのでやっと戦争に行けるという思いだったようです。でも令状を見て「41歳の私に令状が来るのはこの戦争は負けや」といいました。私は日本が負けるとは思いませんでしたし、学校の先生も必ずこの戦争は勝つとっておられました。納得いきませんでした。

8月15日、戦争がようやく終結しました。喜んでよいのか、悲しんでよいのか、とにかく今夜から空襲警報のサイレンが鳴らない、灯火管制もしなくてよい、穏やかな静かな夜が訪れました。学校は9月から再開され、校長先生が軍服から背広姿で来校され、動員先から帰ってこられた先生方の優しい面立ちが一層新鮮でした。奉安殿の礼拝もなくなり厳しかった校則の修練鑑も一部修正され、校歌はそのまま「清き白梅魂」が引き継がれました。2年後に学制改革となり新しい制度で女学校は終わりました。

現在南浜集落には戦死された20名の若者たちの墓碑が立っています。功績をたたえた立派なお墓には、中支、北支、サイパン、グアム、沖縄など戦死された地名が記されています。毎年8月には若くして国家のために命を捧げられた方々のために南浜主催の慰霊祭が行われています。2度とあつてはならない戦争の犠牲者の御霊に今日の平和があることを感謝し「安らかに」とお祈りする集落の報恩の行事です。若者に未来がなかった戦争に思いを馳せ、戦後72年続いた平和を保ち続けるための努力を後世に伝えていかねばならないと思います。

2016年度 資料・図書などの寄贈者一覧

2016度は、以下の方々から資料や図書などをご寄贈いただきました。お名前を記し、感謝の意を表します(敬称略・50音順)。

資料	足立 恭子 家長 福成 井上 泰行 印藤 孝 奥田 早苗 木下 一樹	公庄 れい 雀部久美子 鈴木美雅子 田尻 睦 多田 彦士 辻村 哲夫	中村 正紀 西川 忠樹 西村 正滋 西山 直子 蜷木美千代 人見田鶴子	牧田 繁 福井 京子 前川 薫 増井 幸子 松岡 正樹 村岡 潤一	元山富士男 山田 晴美 湯川 春洋
図書	赤塚 康雄 足立 恭子 安齋 育郎 石井 雍大 石子 順 伊藤 昭 岩本 賢三	植野 真澄 Erik Somers 岡井 禮子 越智信一朗 河合 誠治 貴志 俊彦 木下 健蔵	木村 京子 桐畑 米蔵 小林 悦子 蔡 敦達 齊藤 孝治 四國 光 設楽 幸生	鈴木美雅子 須藤のぶ子 高杉 巴彦 多田 彦士 辻村 哲夫 名和まさ糸 深田 悦子	藤原 栄一 星野 光世 村尾 孝 森 亜紀子

*以上、掲載の許可をいただいたの方々につきまして、お名前を掲載いたしました。

入館者状況（2016年4月～2017年3月）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	
開館日数	25	25	27	27	26	19	26	24	21	22	23	28	293	
入館者数	1,786	4,286	5,683	2,781	2,118	1,580	7,914	6,950	3,989	1,046	1,601	1,025	40,759	
累計（開館当初からの入館者数）													1,025,927	
特別展	4/23～5/29	春季特別展 KYOTOGRAPHIE 共同企画「WILL：意志、遺言、そして未来—報道写真家・福島菊次郎」											4,411	
	6/3～7/24	特別展 世界報道写真展2016— WORLD PRESS PHOTO 16—												
	6/3～6/25	京都会場：立命館大学衣笠キャンパス 中野記念ホール											4,223	
	6/27～7/8	滋賀会場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポック立命21 エポックホール											852	
	7/11～7/24	大分会場：立命館アジア太平洋大学 A棟コンベンションホール											2,342	
	10/1～12/11	秋季特別展 「絵葉書にみる日本と中国：1894～1945」											16,867	
ミニ企画展示	4/1～4/22	第99回 「熟覧—メディア資料室への誘い」											—	
	4/29～5/29	第100回 「満州報国農場とは何だったのか—東京農大湖北農場を中心に—」											—	
	6/4～6/26	第101回 「遺品の語る沖繩戦—遺骨収容家・国吉勇」											—	
	7/12～8/26	第102回 「ポストカード・インパクト」											—	
	9/13～10/2	第103回 「ミュージアム・この1てん あたらしい憲法のはなし」											—	
	10/9～12/16	第104回 「第10回立命館附属校平和教育実践展示」											—	
	1/12～1/31	第105回 「ミュージアム・この1てん 『対敵宣傳須知』」											—	
	2/4～3/26	第106回 第22回京都ミュージアムロード参加企画「京都と空襲」 関連企画 京都放送劇団 放送劇「戦火の杖音」											—	
	講演会ほか	3/27～4/10	ドイツ統一への道 旧東独社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金およびドイツ外務省によるパネル展（後援） 〈春季特別展〉											
		4/23	ギャラリートーク 講師：那須圭子氏（フォトジャーナリスト）											31
5/14		映画「ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎 90歳」上映会&トークセッション/アンスティチュ・フランセ関西 講師：長谷川三郎監督、川村健一郎氏（本学映像学部教授）											81	
5/20		2016年度 第1回メディア資料研究会 報告者：丸山彩氏（本学文学部非常勤講師）、織田康孝氏（本学大学院文学研究科） 〈世界報道写真展2016〉												
6/10		公開記念講演会「戦争の記憶の継承と写真の役割」講師：エリック・ソーメルズ博士（オランダ戦争・ホロコースト・大虐殺研究所研究員）											100	
6/18		小原一真トークイベント「フォトジャーナリズムは時代にどう向き合うのか」講師：小原一真氏（フォトジャーナリスト）											60	
6/11		国際ワークショップ 講師：エリック・ソーメルズ博士（オランダ戦争・ホロコースト・大虐殺研究所研究員）											40	
6/21		NGO ワークショップ 「良心の囚人を救うために私たちができること～アジア地域、開発の陰で苦しむ人々～」 講師：佐野陽子氏（公益社団法人 アムネスティ・インターナショナル日本会員）											11	
7/8		科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト第1回ワークショップ												
7/24		夏休み親子企画「へいわ」ってなに？ 2016～きく、よむ、かんがえる 平和のはなし～ 講師：安齋育郎名誉館長											35	
7/26～7/31		平成28年茨木市非核平和展 平和を求めて広がる非核都市宣言（協力）/茨木市立中央図書館											オープン	
7/27～		小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会（6日間・7/27、7/28、7/29、8/17、8/18、8/19）											60	
7/30		2016年度 第2回メディア資料研究会 報告者：白木正俊氏（京都大学大学院文学研究科）												
8/2～8/7		2016年（第36回）平和のための京都の戦争展（会場）												
8/3		来館者100万人達成セレモニー 〈立命館土曜講座〉「世界は今—戦争から和解へ、対立から共生へ」/末川記念会館												
8/20		「市民の力で核のない世界を—原爆の凶アメリカ展と米国NGOヒバクシャ・ストーリーズの取り組みから」講師：小寺隆幸氏（原爆の凶丸木美術館理事長）											120	
8/27		「紛争後の正義と和解をめぐる相克—痛ましい過去を乗り越える多様な試み」講師：クロス京子氏（本学国際関係学部准教授）											130	
8/25～9/18		京都・大学ミュージアム連携合同展覧会「大学は宝箱！」（収蔵品出品）/同志社大学ハリス理化学館同志社ギャラリー2階企画展示室											オープン	
9/11		第50回原爆忌全国俳句大会（後援）											12	
9/14～9/23		〈RENKEI PAX SCHOOL 2016〉												
9/15		公開講演会 What is "I"? ~ Individual or "Dividual" 講師：平野啓一郎氏（作家）/創思館カンファレンスホール											70	
9/19		公開講演会 What does Isreal fear from Palestine? 講師：ラジャ・シェハデ氏（弁護士・作家）/創思館カンファレンスホール											48	
10/10・11		第23回日本平和博物館会議											23	
10/10		「世界の平和博物館の実情と課題」講師：安齋育郎氏（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）											35	
10/11		「博物館体験の長期記憶を探る—来館者調査の意義と課題—」講師：湯浅万紀子氏（北海道大学総合博物館） 〈秋季特別展〉											26	
10/29		「絵葉書で旅する大日本帝国—日中関係と日本人—」講師：二松啓紀氏（立命館大学社会システム研究所客員研究員）											80	
11/26		映画『蟻の兵隊』上映会&池谷監督トークイベント 池谷薫監督/立命館大学衣笠キャンパス充光館301教室											60	
12/1		平和教育研究センター設置												
12/2		第63回不戦のつどい「わだつみ像」前集会（会場）												
12/9		2016年度 第3回メディア資料研究会 報告者：貴志俊彦氏（京都大学地域研究統合情報センター・教授）												
1/13	科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト第2回ワークショップ													
1/26	2016年度 第4回メディア資料研究会 報告者：篠田裕介氏（国際平和ミュージアム学芸員）													
1/21～3/18	立命館大学国際地域研究所 平和主義研究会（共催）													

※会場記載のないものは、すべて国際平和ミュージアムにて開催

編集後記

「春季特別展 DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展」が閉幕しました。世界を覆う危機はとどまるところを知らず、それを伝えるべきジャーナリズムの在り方や表現の自由について憂慮せざるをえない状況も生まれているだけに、見学者の関心の高さがアンケートにも現れていました。戦下で傷つき声も出ない子どもの姿やダーティー・ツーリズムに参加する日本の若者の写真等に、「世界でこんなことが起こっているのを知らなかった、心が痛む」、「マスコミが伝ええない現実がここにある」という驚きとやりきれない気持ちも寄せられています。そんな中に「自分が大学で何を学ぶべきかということについて考えを深めるよい機会になりました」という学生の感想がありました。世界が直面する問題と当事者として現場で生きる人々の姿を心と理性で受け止め、その現実にとどのように対峙し生きていくべきなのかを考えるという、そこに一枚の写真のもつ力と、写真が伝えようとした真実と向き合おうとした見学者との無数の対話があったことを実感する一文でした。

INFORMATION

立命館大学国際平和ミュージアム開館 25 周年記念 2017 年度秋季特別展 儀間比呂志版画展 —沖繩への思い—

会 期：2017 年 11 月 1 日（水）～12 月 23 日（土・祝）

前期：11 月 1 日（水）～11 月 26 日（日）

後期：11 月 28 日（火）～12 月 23 日（土・祝）※前後期で一部展示替えがあります。

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1 階中野記念ホール

開館時間：9：30～16：30（入館は 16：00 まで）

休 館 日：月曜日、11 月 4 日（土）、24 日（金）

参 観 料：大人 400 円（350 円）、中学生・高校生 300 円（250 円）、小学生 200 円（150 円）

※上記（ ）内は 20 名以上の団体料金です。常設展もあわせて見学いただけます。

※関西文化の日 11 月 18 日（土）・19 日（日）は入館無料です。

開催趣旨

1923 年沖繩に生まれた儀間比呂志氏は、1940 年から北マリアナ諸島テニアン島で過ごしました。1943 年に帰国し、その後出征。配属先の横須賀で敗戦を迎えました。戦後の混乱の中、アメリカ軍政下の沖繩へは戻らず、復員列車の終点であった大阪に居住。1946 年から 6 年間、大阪市美術研究所で油絵を研修後、上野誠に木版画を学び制作活動を始めました。1956 年には 13 年ぶりの沖繩で最初の個展を開き、以後定期的に開催。沖繩への取材を重ねながら、人々の暮らしや祭の姿など故郷沖繩の風景を作品にしました。

1970 年以降は、作品の普及や力強い表現力を求め木版画に専念。この頃、住民の証言記録に接し、沖繩戦を描くようになりました。数々の画集や絵本の出版、日本各地で開催した展覧会を通じて作品を発表し、2017 年 4 月に亡くなるまで沖繩への思いを伝え続けました。

本展では、2016 年に寄贈された奥田豊氏の旧蔵コレクション 68 点を紹介し、沖繩返還から 45 年を迎えた本年に、沖繩戦と戦後の沖繩が直面する課題に私たちがいかに向き合うべきかを考えます。

【主な受賞歴】

1959 年 行動美術展新人賞、1966 年 同会友賞、1971 年 毎日出版文化賞、1976 年 サンケイ児童出版文化賞

1980 年 沖繩タイムス芸術選賞絵画部門大賞、2012 年 琉球新報賞、沖繩県功労者

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

後援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK 京都放送局

KBS 京都、朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞京都支局、読売新聞社



「眼窩」



「アリアンのうた」



「沖繩のさげび 蛇皮線」



「那覇の市場」

関
連
イ
ベ
ン
ト

三線演奏

「南洋諸島で響いた三線の音」(仮)

11 月 3 日（金・祝）14：00～

立命館大学国際平和ミュージアム 1 階ロビー

出演：栗山新也氏（国際日本文化研究センター・日本学術振興会特別研究員）

※イベントの参加は無料・申込不要です。他に関連講演会等を予定しています。詳細は HP にてお知らせします。

立命館大学国際平和ミュージアムだより

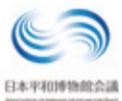
第 25 巻第 1 号（通巻 71 号）2017 年 8 月 18 日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL：075-465-8151 / FAX：075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum>



日本平和博物館協議会
Association of Japanese Peace Museums